「筆記具の持ち方」の指導について

木戸　久二子

１．学習指導要領での扱い

『小学校学習指導要領』で「筆記具の持ち方」について言及されるのは、第１学年及び第２学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「書写に関する事項」においてである。

（２）書写に関する次の事項について指導する。

ア　姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。

とある。

また、『小学校学習指導要領解説』には、

「姿勢や筆記具の持ち方を正しくし」とは、読みやく整った文字を効率よく書くために必要なことを示したものである。「姿勢」は、文字を書くときの構えのことである。正しい姿勢になるには、背筋を伸ばした状態で体を安定させたり、書く位置と目の距離を適度に取ったり、筆記具を持ったときに筆先が見えるようにすることが重要である。「筆記具」は、低学年では、鉛筆やフェルトペンを使用する。「持ち方を正しく」するためには、人差し指と親指と中指の位置、手首の状態や鉛筆の軸の角度などを適切にすることが必要である。

と述べられる。さらに、「姿勢と筆記具の持ち方は、深く関連している」として、

例えば、執筆に際して親指が人差し指の先より下がった場合、筆先を親指の先端が隠すため、児童は横から紙面をのぞき込む姿勢をとる。このような執筆傾向があることへの意識が欠けたままで、「背筋を伸ばす」といった指導のみが加えられた場合、児童は筆先を注視することなく文字を書くことになる。このようなことがないように関連性を考えて指導することが大切である。

と記されている。

今回の改定前の『指導要領解説』では、「国語科書写の指導のねらいは、言語記号としての文字の定着や活用を考え、伝達性を高めるための基礎的・基本的な事項を的確に押さえることである」とし、小学校入学以前に「見よう見まね」で開始された文字習得から確実な文字活用の力を獲得できるようになるために、綿密に指導を行うことが求められる、としていた。「正しい持ち方」の「正しい」とは、「文字を書く運動を高める機能性に裏付けされたものという意味であり、形式的な形のみを指すものではない」ともあった。さらに、「用具を正確に誘導すべき人差し指が反り返ったり硬直化したりするのでは、用具は自由に運用されにくい」と述べたり、折に触れ提示する観点として、「用具を持ったときに、筆先が見えるかどうか確かめる」・「指が痛くなるような持ち方で、文字を書いていないかを確かめる」と具体的に挙げたりもしていたが、今回の改定で削除されている。

２．「正しい持ち方」と教科書での扱い

『小学校学習指導要領解説』には、「人差し指と親指と中指の位置、手首の状態や鉛筆の軸の角度などを適切にすることが必要である」と記され、改定前の『指導要領解説』には、「正しい持ち方」の「正しい」は「形式的な形のみを指すものではない」ともあったが、どういう形が適切なのか要領を得ない。具体的にはどのように筆記具を持てばよいのであろうか。

押木秀樹氏らは、「正しい持ち方」という発想は「『正しい持ち方ではなくとも書けるのになぜいけないのか』といった反発を招きかねない」として、「望ましい持ち方」という表現を

用いている。[1] 筆者も本論では「望ましい持ち方」と表現していくことにする。押木氏らが指摘している「望ましい持ち方」の用件を以下にまとめてみる。

筆記具に接する指の位置

親指…第一関節より先の中央部。

人差し指…①第一関節より先の中央部。
②第三関節から第二関節の間。

中指…第一関節下の側面。

机に接する指と形状

中指・薬指・小指をそろえた状態で軽く丸め、小指が机に接する。

指が接する筆記具の位置

人差し指…鉛筆の場合、削り際のやや上。親指より筆記具の先に位置する。

親指…人差し指よりも筆記具の先端部から離れる。

筆記具の角度

前方から見て20度程度、側方から見て60度程度。

その他

人差し指は第二関節が突出しない程度に曲げる。

力を入れ過ぎない。

子どもが筆記具を持ち始める当初、文字を書くために普通の黒鉛筆を持つ前に、殴り書きやお絵描き・色を塗るなど、色鉛筆やクレヨン、フェルトペンなどを手にすることが多いのではないだろうか。5歳児クラスになると、小学校入学を控えて自分の名前を書くことを求められたり、遊びの中で文字を書く必要が生じたりする機会が増えてくる。ちょうどこの時期、指の機能を生かして書けるようになる（腕全体や手首を用いて書く段階から小指を机に付け、手で書く持ち方に移行する）という。平仮名ドリルや鉛筆の持ち方の矯正器具（後述）を一斉購入させて使用している園も見られる。

しかし、『幼稚園教育要領』には「文字を書く」ことに関する記述は一切ない。当然、筆記具の持ち方に関する記述なども見られない。小学校入学時の指導が大切、ということになるが、いったん身に付けた持ち方を変えることにはある程度の困難を伴うことも予想されよう。

小学校1年生上の国語教科書を確認しておこう。

M社は、10ページに鉛筆を持った右手の写真が載せられている。T・K・G社はそれぞれ19・11・21ページに、鉛筆を持って机に向かい椅子に座っている子どもの全身写真が載る。S社は筆記具の持ち方については記載がない。

小学校1年生上の国語教科書に筆記具の持ち方についてあまり詳しく載っていないのには理由がある。指導要領でも筆記具の持ち方に関しては「書写に関する事項」の項目に入っていたように、書写での指導事項と見なされているからなのである。書写ではどの教科書も、冒頭に見開き2ページで手元の写真と全身写真を大きく載せている。1・2年生はまだ硬筆のみだが、毛筆が始まる3年以上になると毛筆の持ち方も載るようになる。

3．短期大学部生の実態

筆者が講義を担当している短期大学部の学生に対し、筆記具の持ち方の調査を行った。

Ⅰ専攻では、「望ましい持ち方」で持っていたのは21名中8名（38パーセント）、Ⅱ専攻では16名中7名（47パーセント）という結果であった。この38パーセント・47パーセントという数字は決して低くいわけではないと思われる。Ⅰ・Ⅱ以外の専攻ではきちんとした調査を行ってはいないが、講義中や試験中に机間巡視しながら眺めていると、「望ましい持ち方」で持っているのはどのクラスでも3分の1程度に過ぎないからである。なお、これは自己流の持ち方が定着してしまった大学生だからかと思っていたが、学生の教育実習時に訪問して研究授業を参観した小学校の児童たち（2・3年生1クラスずつ）でも同じような割合であった。

正しくない持ち方の具体的の形としては、人差し指と中指の位置は正しいが親指が人差し指にかかってしまうAの形（写真①）が一番多く見られる（Ⅰ専攻8名、Ⅱ専攻7名）。Bは毛筆の太筆を持つときのように人差し指と中指の2本が鉛筆の上にかかり、薬指の上に載っている形（写真②）だが、これは多くはなくてⅠ

写真①

写真②

写真③

組１名のみである。むしろ人差し指・中指がＢの形で、さらにＡのように親指が人差し指にかかる形（Ａ＋Ｂ）（写真③）の方が多く、Ⅰ専攻３名、Ⅱ専攻２名であった。さらに、親指が人差し指の上に乗るのではなく人差し指の下に潜り込んでいる場合も、Ａ・Ｂそれぞれに見られる（写真④⑤）。

写真④

写真⑤

また、筆記具の持ち方について、おかしいと指摘を受けたり指導されたりしたことがあるかどうかも尋ねてみた。Ⅰ専攻６名・Ⅱ専攻７名が指摘されたことがあるという回答で、相手は親が一番多く、続いて小学校の担任教員、習い事としての習字の先生、という順番である。祖母や妹、友人、教育実習先の児童、という回答もあった。その指摘で持ち方を改めた場合もあるようだが、現在も「望ましい持ち方」をしていない学生も多くに持ち方について指摘された経験があることが分かった。

４．有効な指導

さて、それでは筆記具の「望ましい持ち方」を身に付けるためにはどうすればよいのだろうか。

「望ましい持ち方」を覚えるあるいは矯正するための器具が複数販売されている。多くは鉛

筆を持つ部分に差し込んで使用し、３本の指が正しい位置に来るように工夫されているものである。値段も100円から250円程度で、幼稚園の５歳児クラスの園児に一律購入させている例も聞いたことがある。また、３本の指で持つ感覚を身に付けやすいということで、断面が三角形になっている鉛筆も販売されている。

「望ましい持ち方」を身に付ける方法として、筆者が有効だと思う例を一つ、次に掲げよう。NHKのＥテレ[(2)]が小学校１年生向けに放送している「できたできたできた」という番組で紹介している「花まるロック」という歌である。第５回「きれいにするとすぐ見つかるね」の回で歌われた「えんぴつのもちかた」の歌詞を一部抜粋する。[(3)]

オッケーサインで　あたまつまんで
おしりをクルン！
中ゆび下からささえてごらん（ピタ！）
かた手をノートに　そえてごらん（シャキン！）
ほらきれいにかけたよ　あかさたな

前章で述べたように、「望ましい持ち方」でない持ち方は、親指の第一関節より先の中央部がきちんと鉛筆に接していない場合がほとんどなので、この歌のように親指と人差し指でオッケーサインを作り、それで鉛筆の頭（削ってある部分と削っていない部分の境目より少し削っていない方に下がるとよい）をつまんで…というのが非常に有効で、子どもにも分かりやすいと思う。幼稚園で自己流の持ち方が定着してしまったものを小学校で矯正する場合はもちろん、幼稚園や家庭での指導でも使えるのではないだろうか。

５．海外での状況

ところで、海外では筆記具の持ち方に関し、どのように認識されているのであろうか。

欧米では筆記具の持ち方についてあまり頓着しないのではないかと漠然と感じていたが、調べてみると、日本同様、三角形の鉛筆も矯正器具も販売されているようである。[(4)]

また、一般に思われているほどには、筆記具の持ち方のせいで読みにくい文字になったり手が痛くなったりということはなかった、という報告もある。[(5)]

注

(1) 押木秀樹・近藤聖子・橋本愛「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」(『書写書道教育研究』第１７号、2003年３月)。
(2) 2011年６月１日より「NHK教育テレビ」に代わる一般名称として採用された。
(3) 作詞：田形美喜子、作曲：武藤良明、振付：林選、歌：マユミーヌ＆できたらバンド。
(4) 〈http://www.peterson-handwriting.com/pencilgr.htm〉など。
(5) Ann-Sofie Solin, “Pencil grip: a descriptive model and four empirical stidies”Abo Akademi University Press, 2003.

参考文献

『小学校学習指導要領解説　国語編』(東洋館出版社、2008)。
『小学校学習指導要領解説　国語編』(東洋館出版社、1999)。
『小学校国語教科書』(光村図書出版、東京書籍、教育出版、学校図書、三省堂)。